

涙のおにぎり

古河市立中央小学校

六年

中村

勝太

「いらっしやい。

いきなりおばあちゃんに声をかけられて、セミかにげていてしまっただ。夏休み、おばあちゃんちに来ると、いつもセミとりから始めるぼくは、がっかりした。そんなぼくを見ても、おばあちゃんは何も言わずに立っていった。いつもなら、ぼくの大好きなおにぎりを作ってまわっていてくれるが、今年はおにぎりが作れない。昨年病気になって、左半分の体が思うように動かなくなってしまったからだ。「りょうの大好きなおにぎり、作っておけな

くてごめんね。」

おばあちゃん、急にさみしそうに顔を曇らした。

ぼくは、調理実習で土なべでご飯をたい

た事を思い出した。急いでお母さんの所へ行

って、土なべでご飯をたいておばあちゃんに

食べさせてあげたいと話した。お母さんは大

賛成。天気もよかったので、庭でご飯をたい

て、みんなで食べることにした。ガスコンロの準備、お米をといで……。ぼくひとりで全部準備した。難しいのは火加減だ。ぼくはずっと土なべのそばにいて、火を見つめていた。時々、おはあちゃんが、

「上手に出来るかな？ 楽しみだな。」

と声をかけてくれたが、ぼくは一生けん命で「あ」と返事が出来なかった。だんだんと湯気が出てきて、グツグツと音がしてきた。ぼくもドキドキしてきた。いいにおいもしてき

て、いつの間にかみんな集まってきた。学校で習った手順でたいたので、自信作。ふたをあけると、湯気と同時に、あまいにおいと少しこげたにおいがして、みんな、

「わー!!!」

と声をあげた。その声を聞いて、「うまいいったなし」とほこらしげに思った。

「あ」とすわっていったおはあちゃんだったけど、ぼくのたいたご飯が見たくて、つえをついて歩いてきた。

「おいしそうだね。いいにおいだ。上手にできたね。」

と、笑顔でほめてくれた。そして喜んでくれた。ぼくは胸が熱くなった。

ご飯をまぜると、土なべの底におこげが出采っていた。特別に、おこげはおはあちゃんにあげた。

夏の筑波山は、何とも言えないきれいな緑色になる。おはあちゃんが元気な時は、いよいよ筑波山に登った事もあったと話すよ。

「りハビリをかんはって、もったもった元気に歩けるようになってまた筑波山に登ろうよ。」とおはあちゃんがゆっくり言った。ぼくはたぎたぎの土なべご飯で、大きなおにぎりをおはあちゃんに作ってあげた。

「たくさん食べて筋肉つけて、また一緒に筑波山に登ろうね。」

おはあちゃんは今、うなずきながら、筑波山をじつと見つめて、おにぎりを食べ始めた。

おはあちゃんの目は涙でいっぱいだった。